



の中の

子どもたち

第15回 もうひとりの息子

—錯綜する家族、ならば親子とは—

川崎 二三彦

手術

鼠径ヘルニアと診断されて入院し、簡単な手術をしたことがあった。驚かされたのは、「あなたは川崎二三彦さんですね」と、わかりきっているのに繰り返し尋ね、タグを付け、さらには手の甲にも直接マジックで名前を書き込んで何重にも間違いを避けようとしていたことだ。念には念を入れるというのはこういうことを指すのだろうか、本人確認の仰々しさには嘖ってしまった。それでも今夏、某大学医学部附属病院では、患者を取り違えて別人の手術を行い、肺の一部を切除したというのだから、笑い話ではない。

そして、父になる

さて、この秋は、産院で子どもを取り違えるというエピソードをもとにした映画が立て続けに2本上映された。“そんな馬鹿な”と思えるような話だが、特に自宅出産から病院での分娩が主流になった昭和40年代頃から、何十件もの取り違い事件があったというから、決して絵空事ではないのである。



それはさておき、そのうちの1本は、6歳で取り違いが発覚した「[そして父になる](#)」。カンヌ国際映画祭で審査員賞を受賞した話題作だというので、私

も早々と映画館に足を運んだ。ただし、今号で取り上げるのは別作品「もうひとりの息子」だ。こちらは子どもが18歳になってから初めて取り違えに気づくという設定だけれど、2作品を並べてみて改めて考えたのは、「そして父となる」というタイトルについてだ。なぜと言って、赤ちゃん取り違いというのであれば、これは家族の、また夫婦の問題であって、わざわざ「父」をタイトルにする必要はないではないか。

だが、こうした問題が起こると真っ先に立ち現れるのが、「疑う者」としての父と、「疑われる存在」としての母だろう。ところが、2つの映画に出てくる4人の母は、誰もがとまどい、苦悩し、あるいは自責の念に捕らわれながらも、母であるという一点に限れば揺らぐなどということはありません。一方、父の動揺は根源的な不安と繋がっている。言うなれば、赤ちゃん取り違いの事実が明らかになった途端、4人の母は瞬時にして、育てた子と産んだ子の2人の母になり、父は2人の子いずれに対しても父たり得なくなってしまうのである。だからこそ、映画は物語の展開過程を「そして」で示唆し、希望を暗示し、物語の帰結を指し示す「父になる」をタイトルに選んだのではないだろうか。

パレスチナ問題と家族

閑話休題。本作では、取り違えられた2組の家族が、対立関係にあるユダヤ人とパレスチナ人であったこと、子ども時代の全てと言っていい18年間を、実の親子としてそれぞれの文化の中で暮らしてきたことが重大問題となる。

かつて私は、連載第6回で、「[いの](#)

「ちの子ども」を取り上げたが、それは、余命を宣告されたパレスチナ人の子どもを救うために、1人のイスラエル人医師が立ち上がるというドキュメンタリーだった。「幼い子どもの命を前にすると、二千年の対立も何もかもが消し飛ぶ」というのが私の感想だったが、今度ばかりはそう簡単にはいかない。

拒絶した者

興味深かったのは、彼らの18年間の“育ち”を否定したのが、パレスチナの家族にあっては彼の兄であり、イスラエルではユダヤ教であった点だ。

「実母がユダヤ人ではないヨセフは、もはやユダヤ人ではない」

ユダヤ教の宗教指導者は、相談に来た彼に対し、静かに、しかし妥協の余地なくそう告げる。他方、18年間ずっと兄弟として暮らしてきたはずの兄は、イスラエルとの闘いこそが全てに優先するのであろう、ヤシンがまるでスパイでもあったかの如く、「おまえはユダヤ人だ」「向こうで暮らせ」と、激しくかつ反射的に彼を拒絶するのであった。

「なるほどな」

と、私は思う。兄と宗教指導者、まさに彼らこそ、社会の主要なイデオロギーを代表し、「血は守らなければならない」と主張するのである。

ここへきて物語の構図は明瞭になった。取り違えが発覚して、2人が生きる社会は、彼らをその血ゆえに拒絶し、父は激しく動揺する。他方、母は手塩にかけて育てた子に加え、「もうひとりの息子」をも発見したのであり、2人の息子は、このような中で自らの道を模索するのである。

運命

「知った時、どんな気分だった？」

「たぶん、君と同じさ」

それまで思い描いていた未来について否応なく変更を強いられた彼らは、しかし健気に、また懸命にその運命を受け入れようとする。2人で度々出会う話し、ともに行動する姿は、まるでそれぞれの人生を交換し、合体させ



るかのように、私には感じられた。

むろん、「そして父となる」の小さな主人公たちも、同じ事態に直面させられ、親と子という根本問題についての不条理に、必死になって抵抗する。

「これからはおじさんをパパと呼ぶ」

「なんで？ おじさん、パパちゃんやん」

「これからはおじさんがパパなんだ」

「なんで？」

「なんででも」

「なんで？」

琉晴は執拗に問いかけることで、降りかかる運命と闘おうとするのだし、慶多だって、家族を交換することが「ミッション」だと言われて従順に従うように見えて、その実、久方ぶりにやって来た“父”を精一杯拒絶する。

とすると、彼は一体“誰の”父になったのだろうか……。

2つの作品の2つの物語は、それぞれ余韻を残してエンディングを迎えるのであった。

* 2012 / フランス

* 鑑賞データ 2013/10/28 シネスイッチ銀座

* 公式 HP <http://www.moviola.jp/son/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/35237>

第1回	プレジャス	* 題名を click すると本文へ移 動します。
第2回	クロッシング	
第3回	冬の小鳥	
第4回	その街の子ども	
第5回	八日目の蟬	
第6回	いのちの子ども	
第7回	ラビット・ホール	
第8回	サラの鍵	
第9回	少年と自転車	
第10回	オレンジと太陽	
第11回	孤独なツバメたち	
第12回	明日の空の向こうに	
第13回	旅立ちの島唄	
第14回	くちづけ	